



TITLE:

楕円曲面に対する局所トレリの定理

AUTHOR(S):

斎藤, 政彦

CITATION:

斎藤, 政彦. 楕円曲面に対する局所トレリの定理. 代数幾何学シンポジウム記録 1982, 1982: 56-68

ISSUE DATE:

1982

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212624>

RIGHT:

楕円曲面に対する局所トレリの定理

京大理 奇藤 政彦

X を 2 次元 コンパクト 複素多様体 とする。
 X の 正則 2 形式 による “周期” が X の モデュライ
 を とれ だけ 記述 する か を 考える。(トレリ の 問
 題)。K-3 曲面, 複素トーラス, 一般型 $(c_1(X))^2 = p_g(X)$
 $= 1$ の 時 は, くわしい 研究 が な され ている。
 本稿では, 楕円曲面に対する周期写像の局所
 的単射性(局所トレリの定理)について述べた
 い と思う。又, 小平曲面のモデュライ空間と大域的
 な周期写像の性質を, 若干述べてみる。(§5)

1. Infinitesimal period map.

以下, 問題を定式化し, 主定理を述べるために
 Infinitesimal period map を定義する。

X を n 次元 コンパクト 複素多様体 とする。
 (必ずしも, ケーラーとは仮定しない。) Ω_X^p を X の 正則 p 形
 式の切断の芽のなす層, $\mathbb{H}_X (= \Omega_X^{1,0})$ を tangent sheaf
 とする。Contraction map $\mathbb{H}_X \otimes \Omega_X^n \rightarrow \Omega_X^{n-1}$ より, 線型
 写像, $H^1(X, \mathbb{H}_X) \otimes H^0(X, \Omega_X^n) \rightarrow H^1(X, \Omega_X^{n-1})$ をえる。

これより自然に、次の線型写像 δ が得られる。

$$\delta : H^1(X, \mathbb{H}_X) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathbb{C}}(H^0(X, \Omega_X^n), H^1(X, \Omega_X^{n-1})).$$

又、その双対写像は Serre duality より

$$\mu = (\delta)^* : H^0(X, \Omega_X^n) \otimes H^{n-1}(X, \Omega_X') \longrightarrow H^{n-1}(X, \Omega_X^n \otimes \Omega_X').$$

によって与えられる。

定義 1.1 δ を X の Infinitesimal period map と呼ぶ。

我々の考える問題は次の問題である。

問題 (Infinitesimal Torelli problem)

□ どのような X について、 δ は単射か決定せよ。□

さて現在まで知られている肯定的な結果を、 $n=2$ の時に (筆者の知る限り) 述べてみよう。

(1) $\Omega_X^2 \cong \mathcal{O}_X$ となす $X : K=3$, 複素トーラス, 小平曲面 (§5).

(2) \mathbb{P}^2 や $\mathbb{P}^1 \times \mathbb{P}^1$ の Cyclic covering

(3) \mathbb{P}^3 の超曲面.

又否定的な結果を述べる。

(1)' $P_g(X) = 0$ か $\dim H^1(X, \mathbb{H}_X) > 0$ の曲面.

(2)' multiple fibre をもつ楕円曲面.

(3)' $B^1(X)$ が奇数かつ 5以上の積円曲面

(4)' $p_g(X) = c_1(X)^2 = 1$ なるある種の general type.

さて我々は, 一般の積円曲面で, $p_g(X) \geq 1$, multiple fibre をもたないものについて問題を考え, 次の定理をえた.

主定理 $\varphi: X \rightarrow C$ を, 曲線 C 上の積円曲面で, 次の条件をみたすとする.

- ① X は第 1 種例外曲線を含まない
- ② X は multiple fibre をもたない.
- ③ $p_g(X) \geq 1$

$J(X)$ を $\varphi: X \rightarrow C$ の函数不変量 (1) を表わす.

δ は次の時, 単射である.

(A) $J(X) \neq \text{const.}$

(B) $J(X) \equiv \text{const.} (\neq 0, 1)$, $C \cong \mathbb{P}_C^1$.

(C) $J(X) \equiv \text{const.} (\neq 0, 1)$ かつ $\chi(X, \mathcal{O}_X) \geq 3$.

(註). $J(X) \neq \text{const.}$ なる条件は generic である. $J(X) \neq \text{const.}$

$C \cong \mathbb{P}_C^1$ の時, K. KiY (7) によって証明されている. 又最近

K. Chakiris (6) は, section を持つ \mathbb{P}^1 上の $p_g(X) \geq 2$ なる, 積円曲面に対して Weak Global Torelli theorem を証明した.

2. 周期写像の復習.

この § では, Infinitesimal period map δ と, 周期写像の関係を復習しよう. 簡単のため, X は曲面とする.

命題 2.1 X : ケラーとは限らない曲面とする. \mathbb{Q} で, $H^2(X, \mathbb{C})$ 上の cup 積を表わす. X の 2nd-cohomology $H^2(X, \mathbb{C})$ は Hodge 構造をもつ. すなわち,

$$H^2(X, \mathbb{C}) = \bigoplus_{p+q=2} H^{p,q}(X), \quad H^{p,q} = \overline{H^{q,p}}$$

$$\text{ただし, } H^{p,q}(X) \cong H^q(X, \Omega_X^p).$$

又 \mathbb{Q} に関して $H^{2,0}(X)^\perp = H^{1,1}(X) \oplus H^{2,0}(X)$ が成り立つ. (小平 (3))

$f: \mathcal{X} \rightarrow S$ を曲面の smooth family とする. この f に対する「Hodge 構造の変形」 \mathcal{H}^2 とは, $(\mathcal{H}^2, \{\mathcal{F}^p\}, \nabla, S)$ という組で次を満たすもの.

- (1) \mathcal{H}^2 : S 上の flat \mathbb{C} vector bundle associated with $R^2 f_* \mathbb{C}_{\mathcal{X}}$.
- (2) ∇ : flat connection on \mathcal{H}^2 .
- (3) $0 = \mathcal{F}^3 \subset \mathcal{F}^2 \subset \mathcal{F}^1 \subset \mathcal{F}^0 = \mathcal{H}^2$ は hol. subbundle に与える filtration.
- (4) $\forall s \in S \quad \mathcal{F}_s^2 \mathcal{H} = H^{2,0}(X_s), \quad \mathcal{F}_s^1 = H^{2,0}(X_s) \oplus H^{1,1}(X_s).$
- (5) $\nabla : \mathcal{O}(\mathcal{F}^p) \rightarrow \mathcal{O}(\mathcal{F}^{p-1}) \otimes \Omega_S^1.$

\mathcal{H}^2 上には各 fibre s ごとに cup 積をもち, 命題 2.1 より, Hodge 構造は \mathcal{F}^2 によって定まる. さてこの意味で周期写像

とは、次のように定義される。 $\lambda_0 \in S$ を 1 つ 固定し、
 S を 十分 小さく 取りかえて、自明に

$$d: H^2 = \bigcup_{s \in S} H^2(X_s, \mathbb{C}) \longrightarrow S \times H^2(X_{\lambda_0}, \mathbb{C}).$$

$$\bigcup_s d_s$$

を 1 つ とす。 $P_g(X_{\lambda_0}) = k$ とし、

$D = \{ (V \subset H^2(X_{\lambda_0}, \mathbb{C})) \in \text{Gr}(k, H^2(X_{\lambda_0}, \mathbb{C})), Q(V, V) = 0 \}$
 と定める。

$$\begin{array}{ccc} \Phi: S & \longrightarrow & D \\ \downarrow \lambda & & \downarrow \\ \lambda & \longrightarrow & (d_{\lambda_0}(H^{2,0}(X_{\lambda})) \subset H^2(X_{\lambda_0}, \mathbb{C})) \end{array}$$

は正則写像であり、これが本来の周期写像である。

基本的なのは、Griffiths, (4) による次の可換図式である。

$$\begin{array}{ccc} T_{\lambda_0}(S) & \xrightarrow{d\Phi_{\lambda_0}} & T_{\Phi(\lambda_0)}(S) \\ \downarrow \rho: \text{Kodaira} & & \uparrow \\ & \text{Spencer map} & \\ H^1(X_{\lambda_0}, \mathbb{H}_{\lambda_0}) & \xrightarrow{\delta} & \text{Hom}(H^0(X, \Omega_X^2), H^1(X, \Omega_X^1)) \end{array}$$

さて X を曲面とし、 $(W, 0)$ をその Kuranishi space、 $f: \mathcal{X} \rightarrow W$
 を Kuranishi family ($f^+(0) = X$) とする。さて一般に W は smooth
 ではないが、簡単のために smooth と仮定する。 $\Phi: W \rightarrow D$
 を上の周期写像とする。Kodaira-Spencer map ρ_0 は単射

だから、次が言える。

$$d\Omega^0 : \text{単射} \iff \delta : \text{単射}.$$

$d\Omega^0$ の単射性より、モジュライの座標が局所的に、周期に依り、得られる事がわかる。この $d\Omega^0$ の単射性は、

Kuranishi space が smooth という仮定のもとで、 δ の単射性に帰着される。さらに δ の dual は

$$(*) : \mu : H^0(X, \Omega_X^2) \otimes H^1(X, \Omega_X^1) \longrightarrow H^1(X, \Omega_X^1 \otimes \Omega_X^2)$$

であり、この map はある意味で調べやすい。

3. 主定理の証明

$\varphi : X \longrightarrow C$ を主定理の仮定を満たす楕円曲面とする。我々は、(*)における μ の全射性を言う。

さて Leray spectral sequence は、 C が曲線であるから E_2 -term で退化し、次の exact sequence を得る。

$$0 \longrightarrow H^1(C, \varphi_* \Omega_X^1) \longrightarrow H^1(X, \Omega_X^1) \longrightarrow H^0(C, R^1 \varphi_* \Omega_X^1) \longrightarrow 0$$

$$0 \longrightarrow H^1(C, \varphi_*(\Omega_X^1 \otimes \Omega_X^1)) \longrightarrow H^1(X, \Omega_X^1 \otimes \Omega_X^1) \longrightarrow H^0(C, R^1 \varphi_*(\Omega_X^1 \otimes \Omega_X^1)) \longrightarrow 0$$

又

$$H^0(C, \varphi_*(\Omega_X^2)) \cong H^0(X, \Omega_X^2).$$

cup 積 μ (*) は、Leray spectral と両立するから、

我々は、 μ は次のように分解することができる。

$$\mu_1: H^0(C, \varphi_* \Omega_X^2) \otimes H^1(C, \varphi_* \Omega_X') \longrightarrow H^1(C, \varphi_*(\Omega_X' \otimes \Omega_X^2))$$

$$\mu_2: H^0(C, \varphi_* \Omega_X^2) \otimes H^0(C, R^1 \varphi_* \Omega_X') \longrightarrow H^0(C, R^1 \varphi_*(\Omega_X' \otimes \Omega_X^2))$$

よって μ の全射性は, μ_1 と μ_2 の全射性に帰着される。さて,
少し, 積用曲面論を復習しよう。

命題 3.1 $\varphi: X \rightarrow C$ を主定理の ①. ② を満たす積
用曲面とする。次が成り立つ。

$$(i) \varphi_* \mathcal{O}_X \cong \mathcal{O}_C \quad (ii) R^1 \varphi_* \mathcal{O}_X \text{ は } C \text{ 上 invertible.}$$

$$(R^1 \varphi_* \mathcal{O}_X \Rightarrow f \text{ と書く}) \quad (iii) \deg f = -\chi(\mathcal{O}_X)$$

$$(iv) \Omega_X^2 \cong \varphi^*(\Omega_C \otimes f^V).$$

証明は, (2). を見よ。

さて, 次の命題が, 本質的である。

命題 3.2 $\varphi: X \rightarrow C$ を上と同じとする。

(I) $J(X) \neq \text{const.}$ ならば次が成り立つ。

$$(a) \varphi_* \Omega_X' \cong \Omega_C'$$

$$(b) R^1 \varphi_* \Omega_X' \cong \mathcal{O}_C \oplus \mathcal{T}_2 \quad (\mathcal{T}_2 \text{ は torsion sheaf})$$

(II) $J(X) \equiv \text{const.} (\neq 0, 1)$ とする。次は exact。

$$0 \rightarrow \Omega_C' \rightarrow \varphi_* \Omega_X' \rightarrow f \rightarrow 0$$

$$0 \rightarrow \Omega_C' \otimes f^V \rightarrow R^1 \varphi_* \Omega_X' \rightarrow \mathcal{O}_C \oplus \mathcal{T}_1 \rightarrow 0$$

\mathcal{T}_1 は torsion sheaf.

証明は 割愛する。(cf. (8))

さて, 命題 3.2 より, 主定理が どのように得られるか述べてよう。

(A) の時, 命題 3.1 (iv), 命題 3.2 より, μ_1, μ_2 は, 次の如き。

$$\mu_1 : H^0(\Omega_C^1 \otimes f^V) \otimes H^1(C, \Omega_C^1) \longrightarrow H^1(C, \Omega_C^1 \otimes \Omega_C^1 \otimes f^V)$$

$$\mu_2 : H^0(\Omega_C^1 \otimes f^V) \otimes H^0(C, \Omega_C^1) \longrightarrow H^0(\Omega_C^1 \otimes f^V) \oplus H^0(\Omega_C^1 \otimes f^V \otimes T_C)$$

$C \cong \mathbb{P}^1$, $\deg \Omega_C^1 \otimes f^V = 0$ の時 ε の如き, $H^1(C, \Omega_C^1 \otimes \Omega_C^1 \otimes f^V) = 0$.
 (他の時は $\deg \Omega_C^1 \otimes f^V > 0$). しかるに, のぞいた場合は, X が $K-3$ で 明か.

又 μ_2 は 明らかに 全射.

(B) の時, $\mu_1^{V(C)}$ Projection formula と 命題 3.2 より μ_1 と μ_2 と 分解する.

しかるに, μ_1 は 明らかに 全射に なる. 又, μ_2 の 分解に よいて.

$$\mu_2' : H^0(C, \Omega_C^1 \otimes f^V) \otimes H^0(C, \Omega_C^1 \otimes f^V) \longrightarrow H^0(C, (\Omega_C^1 \otimes f^V)^{\otimes 2})$$

の 全射性 のみ が 問題. Mumford の 定理 より, $\deg \Omega_C^1 \otimes f^V = 2g-2 + \chi(O_X) \geq 2g+1$ ならば μ_2' は 全射. よって (C) である.

(B) の時は $C \cong \mathbb{P}^1$ より $\deg \Omega_C^1 \otimes f^V \geq 0$ なるので, μ_2' は 全射.

(証明 終り)

4. 結果をまとめておく。ここに書いてない結果は(8)を参照。

$\varphi: X \rightarrow C$ を minimal elliptic surface with multiple fibre
をもたないとする。 $N = \chi(\mathcal{O}_X) = 1 - g(X) + p_g(X) \geq 0$ とおく

(I) $N \geq 1$. δ : Infinitesimal period map (定義1.1)

(a) $g(C) = 0$. X : not injective. O : injective

N	$p_g(X)$	J(X)	$\dim_{\mathbb{C}} H^1(X, \mathcal{O}_X)$	δ	X
1	0		10	X	rational
2	1		20	O	K-3
≥ 3	N-1	not const.	$11N - 3$	O	
		const. $\neq 0, 1$.	$11N - 3$	O	
		$= 0, 1$.	?	?	

(b) $g(C) \geq 1$.

N	$p_g(X)$	J(X)	$\dim_{\mathbb{C}} H^1(X, \mathcal{O}_X)$	δ
1 or 2	$N+g-1$	not const.	$11N + 3g - 3$	O
		const.	?	(?)*
≥ 3	$N+g-1$	not const.	$11N + 3g - 3$	O
		const. $\neq 0, 1$.	$11N + 4g - 3$	O
		$= 0, 1$.	?	?

(II)
 $N = 0$

$p_g(X)$
 $= g(C)$

$g(C)$	$B^1(X)$	$\dim_{\mathbb{C}} H^1(X, \mathcal{O}_X)$	C	δ	X
0	2	4		X	elliptic ruled
	1	4		X	Hopf
1	4	4		O	complex torus
	3	2		O	Kodaira
≥ 2	$2g+2$	$4g-2$	$g(C) = 2$ or non-hyperelliptic	O	
			$g(C) > 2$ and hyperelliptic	X	
	$2g+1$	$4g-2$		X	

5 小平曲面に対する Global Torelli Problem.

この § では, 小平曲面に対して, モデライ空間の構成と周期写像について述べる.

定義 5.1 X を曲面とする. $\Omega_X^2 \cong \mathbb{C}_X$ かつ,

$B^1(X) = 3$ なる時, X を小平曲面と言う.

小平曲面に対しては, 次の定理が基本的である.

定理 5.2 X を Kodaira 曲面とする. \mathbb{C}^2 の座標を (z_1, z_2) とする時, X は次の元で生成された群 Γ による商空間として構成される.

$$g_1: (z_1, z_2) \longrightarrow (z_1, z_2 + \frac{\omega + \sqrt{-1}}{k})$$

$$g_2: (z_1, z_2) \longrightarrow (z_1, z_2 + \frac{\omega + \sqrt{-1}}{k} \tau)$$

$$g_3: (z_1, z_2) \longrightarrow (z_1 + 1, z_2 + z_1)$$

$$g_4: (z_1, z_2) \longrightarrow (z_1 + \omega, z_2 - \sqrt{-1} z_1)$$

ここで, k は正整数, $\tau, \omega \in H = \{z \in \mathbb{C}; \operatorname{Im} z\}$ である. (小平 (3)).

定義 5.3 $\Gamma(\tau, \omega, k)$ を上の g_1, g_2, g_3, g_4 で生成された, \mathbb{C}^2 のアフィン変換群とする. $X(\tau, \omega, k) = \mathbb{C}^2 / \Gamma(\tau, \omega, k)$ を $\text{type}(\tau, \omega, k)$ の小平曲面と言う. 又, k を小平曲面 $X(\tau, \omega, k)$ の次数と言う.

小平曲面のモジュライ空間については次がわかる。

定理 5.4 h を正整数とする。次数 h の小平曲面
のモジュライ空間とする。

$$\mathcal{H} \cong H \times H / \left(\begin{pmatrix} 1 & z \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \times SL(2, \mathbb{Z}) \right).$$

$$H = \{ z \in \mathbb{C} ; \operatorname{Im} z > 0 \}.$$

さて小平曲面 X の 2nd cohomology の free part $H_{\mathbb{Z}}^2 = H^2(X, \mathbb{Z})_{\text{free}}$ は rank 4 で、Hodge 構造は、次で与えられる。

$$H_{\mathbb{Z}}^2 \otimes \mathbb{C} \cong H^0(X, \Omega_X^2) \oplus H^1(X, \Omega_X^1) \oplus H^2(X, \mathcal{O}_X).$$

又、cup 積 P は、次のような intersection matrix で表わされる。

$$P = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & -1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

$$SO(P, H_{\mathbb{Z}}^2) = \{ a \in SL(H_{\mathbb{Z}}^2) \mid {}^t a P a = P \} \text{ とおく.}$$

$$SO(P, H_{\mathbb{Z}}^2) \cong SL(2, \mathbb{Z}) \times SL(2, \mathbb{Z}).$$

$$\mathcal{D} = \left\{ (V \hookrightarrow H_{\mathbb{C}}^2) \in \operatorname{Gr}(1, H_{\mathbb{C}}^2) ; \begin{array}{l} {}^t V P V = 0 \\ {}^t V P \bar{V} > 0 \end{array} \right\}$$

$$= \left\{ [\lambda_1; \lambda_2; \lambda_3; \lambda_4] \in \mathbb{P}^3(\mathbb{C}) ; \begin{array}{l} \lambda_1 \lambda_4 - \lambda_2 \lambda_3 = 0 \\ -\lambda_1 \bar{\lambda}_4 + \lambda_2 \bar{\lambda}_3 + \lambda_3 \bar{\lambda}_2 - \lambda_4 \bar{\lambda}_1 > 0 \end{array} \right\}$$

は、小平曲面の 2nd-cohomology の偏極 Hodge 構造の分類空間 (周期領域)。

$T = \bigcup_{(\tau, \omega) \in H \times H} T(\tau, \omega, k)$ は自然に $\mathbb{C}^2 \times H \times H$ に作用し.

$\pi: \mathbb{C}^2 \times H \times H / T \longrightarrow H \times H$ は, ^{次数 k の}小平曲面の smooth family
で, すべての次数 k の小平曲面と fibre に含む. 同期写像

$\Phi: H \times H \longrightarrow D$ が次のように与えられる.

$\Phi: (\tau, \omega) \longmapsto [1; \tau; \omega; \tau\omega]$. D には $SO(p, H_{\frac{p}{2}})$
が, $H \times H$ には $SL(2, \mathbb{Z}) \times SL(2, \mathbb{Z})$ が act しているが, Φ は, 同型

$SL(2, \mathbb{Z}) \times SL(2, \mathbb{Z}) \xrightarrow{\sim} SO(p, H_{\frac{p}{2}})$ に関して可変的(同型
である事)がわかる。すなわち, $\bar{\Phi}: H \times H / SL(2, \mathbb{Z}) \times SL(2, \mathbb{Z}) \xrightarrow{\sim} D / SO(p, H_{\frac{p}{2}})$

一方, 小平曲面のモジュライ空間から $D / SO(p, H_{\frac{p}{2}})$ への
同期写像 $\tilde{\Phi}: H \times H / \left(\begin{smallmatrix} 1 & \\ 0 & 1 \end{smallmatrix} \right) \times SL(2, \mathbb{Z}) \longrightarrow D / SO(p, H_{\frac{p}{2}})$ は,
 $\bar{\Phi}$ を factor する。大域的なトリの問題とは, $\tilde{\Phi}$ が単射
かを問うものである。以上をまとめると, 次の定理を得る.

定理 5.5 小平曲面に対しては, 同期写像 $\tilde{\Phi}$ は,
無限の写像度をもつ。すなわち, 大域的なトリの定理
はなりたたない。

(注) 小平曲面に対しては 局所トリは成り立つ。

参考文献

1. Kodaira. K., "On compact analytic surfaces I", Ann. of Math., 77 (1960), 111-152.
2. -----, "On compact analytic surfaces II, III", Ann. of Math., 77 (1963), 563-626, 78 (1963), 1-40.
3. -----, "On the structure of compact complex analytic surfaces, I", Amer. J. Math., 86 (1964), 751-798.
4. Griffiths. P., "Periods of integrals on algebraic manifolds I, II", Amer. J. Math., 90 (1968), 586-626, 805-865.
5. -----, "Periods of integrals on algebraic manifolds III", Publ. Math. I. H. E. S., 38 (1970), 125-180.
6. Chakiris. K. A Torelli theorem for simply connected elliptic surface with a section and $p_g \geq 2$. Bulletin of the Amer. Math. Soc. Vol 7 July 1982. 227 ~ 232
7. Kiy ; K.I. The local Torelli theorem for varieties with divisible canonical class, Izv. Akad. Nauk 42 (1978) English transl. (1978) No 1.
8. Saito Ma . On the infinitesimal Torelli problem of elliptic surfaces. (to appear).
J. Math. Kyoto Univ.